

【特集】

# 2011年の高校教育を考える



【特集論文】

【対談】 2011年の

高校教育を展望する

山中伸一×青山 彰

新指導要領に基づく

新たな学校経営

田中統治 ほか

【巻頭インタビュー】

歴史上の人物に  
学ブリーダー学

童門冬一

I 2011/Jan.

# 特色ある、個性ある

# 私学

第68回

Private School

◆久田学園佐世保女子高等学校  
理事長・校長／久田 順子

## 大海の一滴

久田学園佐世保女子高等学校は長崎県佐世保市の中心部から車で10分ほど、西海国立公園の名所の一つ弓張岳の中腹に位置しています。山々の緑に囲まれ、また市街地や佐世保港が一望に見渡せる眺望の地でもあります。学園歌の一節の通り、心身を鍛え、技を練る、高校生にとりましては、申し分のない教育環境と言えるでしょう。

### 「建学の精神」を今に受け継ぐ

本校は明治36（1903）年、私の祖母である久田ワキにより「佐世保裁縫女学

校」として創立されました。女子教育に今ほど理解が高くなかった社会状況の中、社会に貢献する女性の育成、家庭の良き経営者の育成、という高い志を掲げ、24歳での大英断は、想像できないほどの苦勞と並々ならぬ情熱があったことだろうと思います。

それから百余年、世は平成へと移りましたが、創立時の志をしっかりと受け継ぎつつ、各時代に即した取り組みを行ってきています。現在、1学年の定員が40名、普通科のみのいわゆる小規模校です。私はよく

「善かことも悪かことも、すぐ校長先生の目と耳に入ってくる」と冗談交じりに生徒と話しますが、一人ひとりの顔が見え、特性に応じたきめの細かい指導ができるのが利点となっています。

さて、今日の高校教育の現状はと申しますと、経済至上主義・利益優先主義が幅を利かせる現代の風潮と、どうやら同じ土俵に乗せられているようです。本来、教育とは、強い信念と情熱に基づいて行われるべきものです。ところが、世間の風向きを気にするあまり、有名大学進学や資格取得は

かりに汲々となつて、肝心の人間教育が疎かにされていると言わざるを得ません。他者への思いやりや優しさを欠いた過度の競争主義の行きつく先は、弱肉強食の殺伐とした世界だけです。

全国の高校数は、5000校以上。いろいろな学校があつてよいはずですが。特に「建学の精神」という尊い基盤を持つ私立こそが、今こそそれぞれの独自性を発揮して、切磋琢磨していかなければならないと思います。

## 合理性・効率性の追求だけが教育ではない

長い人生の中で、高校時代は最も多感で、様々な物事を柔軟に吸収できる大事な時期です。大人へと成長する過程で、キラキラと輝くべきこの時期に、目先の競争や目的にのみ追われる日々は何とものつたいないことでしょうか。多様な経験や学び、そして幅広い教養をバランスよく身につけること。これこそが豊かな心を養い、人とし

ての深みを醸成していくのです。

久田学園では、普通教科に加え「日本文化」「食」など特色ある取り組みを行っています。そこで公式を丸暗記することでは答えが出ない。人生の応用問題。解決能力を磨いていきます。いわば武者修行型の実践演習です。

本校では正課の授業として、茶道・華道・装道（礼法）をそれぞれ3年間、剣道を3年次というように「日本文化」を履修します。道の根底に流れる他者への思いやりや感謝の心を学んでいきます。同時に、静かな環境の中に身を置き、心を穏やかに集中する時間を過ごすことで、日本人ならではの細やかな感性や美学が磨かれます。これらは無くても生きていける、特段必要のないものです。心や感性など曖昧なものを追求するよりも、英単語の一つでも覚えたほうがどれほど現実的で、役に立つことでしょうか。しかし私は敢えて「否」と声を大にして言いたいのです。

現在の教育は、無駄を一切そぎ落とし、

冷酷で合理的・効率優先の人間を大量生産しています。家庭や学校で、勘違いされた平等・個性尊重の概念のもと、何の制約もなく育てられた若者たち。「より個性的に」「より自分らしく」と無責任な自己主張だけが一流です。それに迎合し「すぐ役に立つこと」「お金になること」ばかりを与え続ける教育界。そのことがかえって没个性的で、豊かさの本質とはかけ離れていることに早く気づくべきです。優しさを常識を兼ね備えた上でこそ、はじめて個性が輝くのです。「自分探しの旅」等とのたまう自意識過剰の頭でつかちには、個性など育ちようがありません。

人間は、足の裏の面積だけでは地球上に立っていただけではありません。周りの広大な土地があるから、自由に歩き回ることができるのです。人生も同様です。カネやモノを手にするために、必要なことさえできればよいという価値観は、非常に窮屈で常に転落・破たんする危険をはらんでいます。無駄を学び楽しみを知るからこそ、有用なことが

理解できるのです。

## 「国際化」食を深く考えるために

本校にはよく留学生が体験授業に訪れ、全員が感激して帰っていかれます。その理由は、1日いるだけで「日本」を実感できるからだと思います。ところで「国際化」とは何でしょうか。英語を話せたり、外国人と接することなのでしょうか。異文化と



スクールランチ

の出会いには新鮮な驚きと感動をもたらします。いくら英語が話せても、そこに日本人

としての教養や文化という基盤がなければ、本物の感動は生まれません。「駅前留学」で「国際化」がなされるのであれば、とくに日本は世界の一等国になっているでしょう。「グローバルな視線」は結構ですが、そのグローバルとやらには日本は入っていないようです。足元を見つめず、遠くばかり見ている人間が、真っ直ぐに歩けるとは思えません。自国の文化を理解し誇りを持ち、他国の文化に敬意を示すことが「国際化」の本質だと思います。

本校の代表的な取り組みとしてもう一つ「スクールランチ(SL)」が挙げられます。これは週に3回(火・水・木)3・4時限目に各学年が当番となり、全校生徒・職員の昼食を調理し、全員で会食するというものです。入学時に恐るおそる包丁を握っていた生徒も、卒業の際には手際のいい腕さばきを見せてくれます。毎回、和洋を問わず多種多様のメニューが登場し、生徒にも

一番人気の授業です。

これらの実習を通して、必要な知識や技術を学んでいくのですが、何か特別の資格を取らんがための取り組みではありません。「食」は生涯関わってくることです。家庭に入る生徒もいるでしょう。温かい料理をつくるお母さんは、子どもにとって何とも頼もしく誇らしい存在です。温かい心のもった食事は、情愛を育てる礎になるのです。思いやりや優しさ、それは市場原理主義や数値目標の中ではなく、日々の真面目な営みの中でこそ育まれるものではないでしょうか。

SLでは、あわせて礼儀作法を学びます。正しい姿勢や箸づかいは、場を共にする人・調理をしてくれた人、そして命を捧げてくれた生き物たちに敬意と感謝を表す最低限のマナーです。しかしながらテレビという公共の電波で、いい加減な箸づかいで行儀悪く食べる芸能人、食べ物をゲーム感覚で扱う番組が垂れ流され続けています。悲しいことに、それが今の日本をすべ



て象徴しています。自然や目に見えないものへの感謝や畏敬の念など微塵も感じられません。

これからの日本は、どこへ向かっていくのでしょうか。「自分らしい生き方」「自分に合った仕事」をと、青い鳥を求めさまよ

## 解説・評言 小池俊夫

私学と「ひと」「もの」②

### 「人によって、人を創る」ことが、 教育の普遍的原理

長崎市での男児殺害、佐世保市の小学校での同級生女児殺害と、心の砂漠化を見せつけられた事件の頃から、何度か話をさせて頂いた「久田節」を、誌上でお届けすることができました。

2010年8月20日付「朝日新聞」で、07年から入試の科目に、「箸の持ち方」を採り入れていることが取り上げられ、「学力だけでは測れない、社会に出てからの底力」が見え、「大人としての品格」につながる、「たかが箸

い続ける人々。平凡で普通の生き方を心の

どこかで軽蔑し、根拠のない自信だけは満ち満ちている人々。謙虚さを忘れ、品格や礼儀など目もくれず、一番になりさえすればよいという「自分勝手至上主義」が蔓延

する日本。本校の取り組みは、風車に立ち向かうドンキホーテと言われるかもしれま

されど箸」だと語られた、久田校長の一貫した教育哲学を改めて伺い、いろいろと考えました。

最近、学生の「文字の乱れ」に頭と目を悩ませています。いまさら何をと言われるかもしれませんが、とにかく「読めない！」のです。それが、圧倒的に理系の男子に目立ちます。「理科離れ」を危惧されながらも、優秀な学生たちも多いのでしょう。難しい言葉は使ってもいいです。パソコンを使って作成させれば、「立派な記述」なのでしょう。しかし、それでいいのでしょうか？

教育における経済第一の市場原理や「数字がすべて」観を、この欄でも嘆いてきました。素早く、目に見える成果を上げなければ評価

せん。

しかし、私たちが世に投じた大海の一滴が、いつか大きなうねりとなることを信じ、これからも愚直に真っ直ぐと歩んでまいります。それが私たちの使命です。

〒857-0040 長崎県佐世保市比良町21-1

TEL 0956-22-4349

されない。成果を出せば、ご褒美(助成金等)が得られる。誰もが靡(な)きます。結果、頭は大きく見えても、心は枯れていきます。

面倒なことは機械にお任せでは、繊細さは芽生えません。人間にとって、「知ること」と「感じること」は共に不可欠なのです。「沈黙の春」の著者である海洋生物学者レイチェル・カーソンは「感性がずっと大事だ」と強調しました。

「日本文化論」などと、もつとももらしい科目を学ばせるよりも、「箸の上げ下ろし」が重要なことを、思い起こすべきです。「たいしたことではない」と高をくくっていると、後世取り返しのつかないことになります。

(昭和女子大学教授)